

ゲイビの後輩が練習を頼んでくるから、
ここぞとばかりにベテランの風格を見せ
つけようとしたら、キラーワードで僕が
イキまくる返り討ちにあったんだけど!?

体験版

攻め：セノ

受け：メロウ/メロさん

要素：年下攻め、言葉責め、おねだり、焦らし、乳首責め、攻めフェラ、前立腺責め、結腸責め、連続絶頂、寝バック、騎乗位等

打ち合わせ終わりに玄関に向かう途中、複数人が自販機前のベンチで談笑する姿を見た。知り合いの人であれば挨拶をしようと足を向けると、僕が向かうより先にこちらに視線を向けた人がいた。そして彼は、僕を見つけるとぱあっと目を輝かせる。

「メロさん！お疲れ様です！」

楽しそうに話していた輪からすぐに抜けて、元気に手を振りながら真っ先に僕の元に来る彼は、この事務所の一員ではない。それなのにどうしてここまで集団に馴染んでいるかというと、かなりの高頻度で事務所に足を運んでいるからだ。そしてその目的は、大概僕であることが多い。

「お疲れセノ君。今日は事務所に用事があったの？」

「そんなのメロさんに用事があるから来たに決まってるじゃないすか！」

駆け寄ってきた彼に本日の予定を聞くと、さも当然と言わんばかりに抱きつかれた。昔は人前で激しめのスキンシップをされるのが嫌だったけれど、人とは慣れる生き物で、もはや抱きつかれ待ちになっている自分がいる。

遠目に生暖かい視線を向けられているのは分かっているのだけれど、こうもストレートに後輩に慕われた経験のない僕は、単純に彼の好意を嬉しく思ってしまう。照れはするものの、悪い気はしない。見えない尻尾を大きく左右に振るセノ君は、そのまま僕と並んで玄関まで歩く。

ただしこの尻尾の持ち主は、決してかわいいワンちゃんではない。とんでもなく肉食な狼なので、油断すると僕が罠にかけられる。

「俺、車で来たんで送ってきますよ！」

「いいの？ありがとう、助かるよ」

「さっき事務所の人から、メロさんが明日休みって聞いたっす！てなわけで、行くのは俺んちでいいですよね！」

「はい！？」

甘い言葉に誘われて車に乗ると、それが当たり前だと言わんばかりにサクッとお持ち帰りをされそうになった。確かに僕は明日休みだけれど、それを知っているセノ君の家に自ら足を運ぶのは危険度が高い。確実にこっぴどく抱かれる未来しかないじゃないか。

せっかく家でゆっくりしようと思っていたのに、これじゃあ真逆の時間を過ごすことになる、僕は慌ててドアに手をかけた。

「良いわけないでしょ！なんでいいと思ったの！？そういう魂胆だったら僕は降りるからね！」

「あ、どうせ出れないんで。出発するからシートベルトしてもらっていいですか？」

けれども、彼はこう見えて計画性のある男だ。開かないように細工された助手席のドアトラップに、僕は何度引っかかれば気が済むのだろう。学ぼうよ、このドアは内側から開かないんだから、乗ったら終わりだって分かっていただろうと、僕は大きなため息をついた。仕方がないので、渋々シートベルトを装着しながら文句を言う。

「...ハメたね、僕を」

「え？まだハメてないっすけど」

「ハメるつもりで乗せたんでしょ？」

「その言い方だと、まるで俺が身体目当ての男みたいじゃないっすか！心外っすよ、もう」

でもセノ君にぐちぐちと小言を連ねると、彼はぶすりと唇を尖らせた。その表情には、悪いことを考えている粘着質な気持ちは透けて見えない。となると彼は、ただ純粹に僕との休日を楽しみたいだけなのだろうか。

確率としては0.00001%に満たない気もするけれど、セノ君の家に行ったところで何も起こらない可能性はある。それに、手を出すつもりならこの車内でもできる。今のところ無害ではあるし、僕の考えすぎとも捉えられる。

実際、ほぼ毎週会っている僕らはかなり仲のいい方だと思う。ただし必ずセットで別の仲良しもしている僕とセノ君の関係性は、仕事仲間の先輩後輩というよりセフレに近い気もする。だけれどこの日は夜までセノ君から一切手を出されなかったし、お風呂から上がってもアクションはなかった。だから完全に気を緩めて、このままゆっくりできそうだとソファであくびをかきながら伸びをしている時、事件は起きた。

うにゃ、あくびの終わりに息をはくと、ぴとっとセノ君が密着してくる。そのまま腰に手を回されて、よからぬ雰囲気を感じた。身体を寄せられると、どうにも不穏な流れなので身構えてしまう。

「ねえメロさん」

「何？」

「メロさんって、手持ちの攻めの台詞って多い人っすか？」

「えっ」

けれど、僕の心配相手から飛び出してきたのは予想外の話だった。なんだなんだいきなり、僕が攻め側になることなんかないのは君も知ってるだろうと、そっと腰の手を外そうとしながら質問に答える。

「いや、僕は基本ネコしかやらないし…。たまに攻めっぽいシチュエーションもするけど、そんなに上手くはないと思うよ？」

「じゃあ受け側の、相手を乗せる台詞は？いっぱいある？」

「そっちはまあ…、それなりに？」

「そっかあ…。やっぱそうっすよね…」

しかし手を外すのには失敗し、なんなら彼は両手を使って僕に抱きついてきた。でもセノ君が、想像以上にがっくりしおれてしょげているので、自分の身よりも彼が心配になってしまった。

どうやらこの様子だと、彼は何か悩みを抱えているらしい。自分の身体も大切ではあるけれど、ここは先輩らしく、彼が仕事を上手くこなしていくための助言をしてあげなくては。

「どうしたの？撮影で何かあった？」

「いや、撮影はこれからなんすけど…。今度、台詞がアドリブ多めの撮影があって。俺、なんだかんだ風俗ではやってたけど、それは客側からのプレイ指定があったから出来たっていうか。何回も来てる人ならそのお客さんとはある程度仲良くなれてるし、自然と言ってほしい言葉が分かる感じで。でも撮影するとなる

と、プレイしてる相手が良くなるっていうより、不特定多数の見てる人が良くなる台詞を考えなきゃいけないじゃないっすか。誰が聞いてもそこそこいい台詞って考えると、めっちゃむずくて…」

「なるほどね」

「だから、できたらどんな台詞がいい感じなのかを、実践的に練習出来たらいいなって思ってるんすけどね？」

アドリブの多い台本が役者泣かせなのは、僕も経験があるから分かる。立場は違えど同じ苦勞が分かる身としては、彼の役には立ってあげたい。

ただし僕はこの展開の果てに、自分の自己犠牲がとてつもなく重くなるのを、身体と頭で良く良く理解していた。

「ねえお願いメロさん、俺の練習付き合ってよぉ」

大きな体から出てくるのは、信じられないほど甘え上手な声と、おねだりの時にだけ見せるうるうるの目だ。出た！伝家の宝刀だ！まずい、これはまずいと、僕の喉からうっと声が出る。

断ったほうがいい。いやでも、困っている後輩を無下にして、きっぱり断るのはかわいそうだ。せめてやり方は僕に任せてもらって、今ここで台詞の練習だけをした方がするのがいいんじゃないのか。彼の言う実践的な練習とは、つまるところセックスだ。本人の希望を全面的に受け入れたら、流れでセノ君と致すことになってしまう。

でも僕は心のどこかで、彼の言い分を受け入れてもいた。やはりこうなってしまうのかと思う反面、どうせ逃げられない運命だったんだと割り切っている。ならもう乗りかかった舟だと思って、後輩の力になってあげようじゃないか。

「ぼ、僕も、攻めの台詞に関してはプロじゃないし...！教えるとしても、台本の設定に基づいたやつしかやらないからね！」

「もちろんもちろん、当然そうするっす。やっぱメロさんて頼りになる」

ただし許可は出すものの、決して乗り気ではない。だから、ああ、言ってしまった、また安請負いしてしまったと自己嫌悪に陥る。そんな僕の頬に、むちゅ、むちゅ、と何度もキスが落とされた。でも今の僕にはセノ君を振りはらう気力すらない。仕方ない、これは仕方のない事だったんだと彼の腕の中で脱力しながら、僕はこの夜の自分の身を案じていた。

練習を始める前に、セノ君から今回の台本の設定をざっくり教えてもらったところ、どうやら恋人同士の甘いプレイがテーマらしい。セノ君は新しい客層を増やそうという事務所側の意向もあり、がっつり男同士が交わる作品でありながらも、根っからのゲイに向けた作品以外に出ることもよくあるイメージだ。きっと今回も彼の見た目の良さを活かして、女性の客層を取り込む魂胆だろう。

「まあざっくり甘々系って感じではあるんですけど。甘いだけだと物足りないってことで、エッチな彼氏がいじめてくる的な内容で」

「っ、なる、ほど」

「だからテイストとしてはハードSMではないんですけど、若干SM寄りではあるっすね。一応俺が考えてる台詞を色々言ってくんで、それはないな〜って思ったら止めてほしいなって。大丈夫そうなら続けてもらって」

「ん、うん」

ただしその説明をするのは、身体をまさぐりながらじゃなくてもいいのではと思う。5分前までの空気をあっという間にいやらしい空気に変えられるのは、さすが元トップタチ風俗ボーイだ。用意されたもので指定された内容をこなす僕とは違って、状況に合わせて相手を乗せていくのが本当に上手い。

入り方も自然だし、なんなら僕とはそれなりに回数を重ねているから、僕が高まる方法もバレているのが恥ずかしかった。

「話してる間も、気持ちよくなっちゃった？」

「ひっ！」

撮影の時なら、次にどんなことが起こるか分かっているから冷静でいられる。でも、こうやって次が分からない状態で不意打ちをされると、自分でも驚くほど肩が跳ねてしまう。

セノ君と身体が密着している右側が、彼にどんどん染められていく。息がかかる耳が熱い。首筋がぞわっとしてきて、何でもない自分を装うために息を整えなくてはいけなくなる。

「キスしょっか」

「っえ、あ、む、んんっ！？」

だけれど僕が呼吸を落ち着かせていると、少し強引に唇が奪われた。もう本格的な練習が始まったのか、まだ僕は役に入り切れていないのにと、彼の舌に合わせながらうろたえる。とはいえこれはあくまで雰囲気作りで、言葉責めの練習はもっと先だ。大丈夫、僕が心の準備をする時間はまだあると思ってキスを終えたら、気持ちを整理する前に早速最初の練習時間がやってきた。

「ねえ、キスだけで勃ってきてる」

「あ、や、これはその」

「触ってほしい？」

「ううんっ...！」

ソファと僕の背中の間を通った左手が、そっと股間の近くを撫でた。その力加減も、位置も、あまりにも的確にじれったくて、思わず腰が動く。キスだけで勃起しろとまで言われていないのに、勝手に勃起上がっていることも、際どい場所を撫でられて期待してしまったことも、両方が恥ずかしくて頬に火が付いた。

でも、これは練習だ。僕が恥ずかしがってではダメだ。先輩らしく演技指導をしなければと、僕はセノ君のTシャツを握りながら、彼を見上げておねだりをしていく。

「そ、そこ...！もっと、触って...？」

「ん～？どうしようかな」

「ふあ、ああっ!？」

ただし今回は、セノ君はSっ気のある彼氏設定だ。そのせいで僕までおあずけをくろうことになってしまい、思い切り悶えてしまった。ぎゅっと抱き寄せて、わざとねっとりと耳を舐めるように囁きながら、太ももの内側を撫でるコンビネーションはずるい。思わず背筋がビリッとするほど感じてしまった。いや、もちろん言葉責めとしてはとてもいい。ただ、僕が一方向的に高まるのはよろしくない気がする。

ダメだ、これは練習だって言っているのに。この調子だと、僕が言いなりになっていじめられてしまう。そうだ、僕は台本の詳細を知らないし、セノ君としては攻め文句のレパートリーが増えればいいんだ。だったら僕が彼を困らせるようなことを言ってみて、それをどう回避するかや、雰囲気壊さずに上に行く台詞が言えるかどうかを試して練習するのも悪くない。

僕だってゲイビの先輩だ。恋人ものも、ちょっとしたSMものも、何本もこなしたことがある。歴で言ったら負けてないんだからなと、僕はセノ君の体にわざと自分の身を近づけた。そのまま彼の手を握って、強めに自分の熱に押し当てる。

「やだ、ちゃんと触って...！いっぱい、やらしいのして...？」

彼の手の方に、ぐっと腰を擦りつけるのも忘れない。でもあまり積極的すぎてもあけすけなので、最初は意気揚々とセノ君を見るけれど、終盤は視線を外して、声を小さくしていく。その一方で、ぎゅっと握る手には力をこめる。

どうだ、これが恥ずかしがる男の理想だ。僕の経験値にひれ伏したらいいと、心の中で得意げになる。ただしあまりにも効果的だったせいで、僕に当たるセノ君の熱が一気に固くなってしまった。うわ、ちょっとやり過ぎたかと自分の行いを悔いるけれど、待ったはさせてもらえない。

「...えっち」

「んんうっ！」

ふっと満足そうに息を吐いたセノ君は、今度こそ焦らさずに僕の熱を握ってきた。服の上から数回揉みこんだ後、するりと下着の中に手を入れる。そして直接熱に触れた瞬間に、わざといやらしい息を耳に落としてくるのも忘れない。

「ああ、すごいぬるぬる。いつから濡らしてたの？」

「っ、キスの、前、から、ずっと...」

「ずっとエロいこと考えてたんだ？スケベだね」

「ッ！」

僕としては、さっきのおねだりは相当良く言えたほうだと思う。だからいっそ、セノ君が慌ててペースを崩せばいいとも思っていた。でもセノ君は興奮したとしても、それで取り乱すことはない。むしろしっかりと意地悪な言葉を言うてくるから、心が乱れるのは僕の方だった。しかも台詞はともかく手つきは相手を感じさせる天才のままだから、僕は気持ちよくなる一方だ。

まずいぞ、このまま流されたら練習どころじゃない。というか本人は苦手と言っているけれど、普通に上手じゃないか？台詞そのものに特別感はなくとも、囁くタイミングや、声のトーンが一流だ。

これだけのことをやってのける彼に、練習はあるんだろうか？いっそ僕が太鼓判を押して、もう十分だと言ってあげるだけでいいんじゃないのか。そうだ、もうこれで実力は分かったのだから、練習を終わりにしてしまおうと、僕は彼の腕を3回ほどタップする。

「あ、ねえ、セノ君？これ、多分僕と練習しなくてもっ」

「だめ。まだ俺が納得できてない」

「っ、でももう十分上手で」

「始まったばかりだからそう思うんすよ。俺、まだまだ全然メロさんをいじめられてないんで」

「やだ、いじめられたくないっ！」

「こんなに先走り出してるくせに。嘘はダメっすよ？」

ただし彼は、残酷にも練習を続行した。広いソファに押し倒されて、シャツをめくられる。でも乳首が空気に触れていても、彼はあえて触れてこない。こっちも

焦らすつもりなのかと、意味がないながらも軽く睨んでしまった。でも、おねだりそのものは慣れている僕は、言えと言われたらある程度のことは言える。舐めないでほしい、こっちだってプロなんだからなと、彼の台詞を先読みして次の言葉を考えた。

「ここはどうしてほしい？」

「う...！乳首も触って？舐めるのも、してほしい...」

「こら。違うでしょ？いつもどう言うって教えてたっけ？」

「はい！？」

けれども相手も百戦錬磨だ。さっさとねだればいいだろうなんて甘い読みでは、揚げ足を取られるだけだった。なんだその設定は？どう言うかなんか知らないよ！と喉元まで文句が出てきていたけれど、ここでどもるのもプライドが許さない。

いいよ、そんなの適当に言えばいいんでしょと、こちらもヤケになってきた。だから自分でシャツを握りながら、うるませた目でセノ君を見つめて言う。

「い、いつもの、カリカリって引っかくやつして？」

「舐めるのは？しなくていいの？」

「それまして、音するくらい吸われるの好きだから...！」

「ん～？違うでしょ？自分の好きなやつ忘れちゃった？」

「ひうっ！」

でも、僕の経験を彼はいつだって上回る。痛い目を見せてやろうなんて気持ちを何度も折ってきた指先が、そっと乳首に触れた。口では意地悪を言うくせに、手つきだけは飛び切り甘くて、思わず腰が揺れる。そして僕がうっかりとろけた息を吐く様子を見守った後、くに、くに、と淡く突起を弄りながら耳元で囁く。

「最初はそんなに激しいことしないでしょ？まずは優しく舐めて、そこから段々強くなってく」

「んっ、あ、あう...！」

「すりすりって触ってあげて、じれったくなってきたらゆっくり舐めてあげて。それでも足りないって顔したら、軽く噛んで。もってってやらしく腰を浮かせてきたら、じゅって音立てて吸って」

「っ...！う、う、ううっ...」

「それから吸いまくって赤くなった乳首、ぺろぺろされるのに弱いんだもんね？」

「んんうっ！」

あとは相変わらずの緩急に、どうしてもしてやられる。このまま言葉だけで厳しく責められるのかと思っていたら、ぴしっと乳首を弾かれた。その時になってようやく、随分と自分が高まっていることに気が付く。追い込まれている、もうこんな所までと自覚させられる。

まずいよ、序盤なのにこんなに感じて。どうしていつもこうなっちゃうの、僕だってベテラン勢の一人なのにと唇を噛むと、また優しく乳首を揉まれた。

「ほらメロウ、やり直したよ。もう一回言って？」

「い、今の、全部っ！？」

「言わないとしてあげないよ？」

身体が求めてしまっている以上、熱を冷ますのは難しい。だからわざと乳首の近くを舐められたりすると、切なくて彼の方に身を寄せてしまう。でも決定打を与えてくれない舌は、そっと遠くに逃げていく。その意地悪な責め方に心の中で地団太を踏むのは、きっと僕だけじゃない。

ひどい、またそうやって僕をいじめるんだ。こうやって欲しいと思わざるを得ないことばかりして。いっそむごいくらいだと、喉が詰まった。でもその悔しい気持ちは、自分を鼓舞する方向にも働く。いや、諦めるな、僕だって一流だ。そもそもセノ君の台詞練習なのだから、雰囲気壊さなければ、僕が彼の求める言葉を言う必要はない。

だったら一周回って、彼が乗るしかないことをしよう。台本上の恋人の性格は知らないけれど、積極的な恋人なら、上手に甘えたおねだりをするはずだ。だから僕は、まだ悪戯をしようともくろむ彼を、ぎゅっと抱きしめた。そのまま身体の向きを上手く調整して、乳首の傍にセノ君の顔を固定する。それからとはびっきりの声を作って、ただただ切ない気持ちを言葉にするだけだ。

「やだ、意地悪しないで...！セノ君の好きにしていいいから、いっぱい舐めてよお...！」

もちろん必死さをアピールするために、話し終えたらさらに腕に力をこめる。早く、早く、と言わんばかりに胸を押し付けると、彼はピタッと動作を止めた。それから、僕をいじめる趣旨を忘れてしまったかのように胸にしゃぶりついてきたので、なんとなく勝負に勝った気になった。上手に僕の方に転がってきてくれたので、ご褒美と言わんばかりに彼の頭を撫でる。

「んああ、あっ、ん、すご、気持ちいい、あ、あうん！は、あ、舐めて、もっと舐めてえ」

ただし勢いが凄い彼は、ぐいぐい僕を押して、僕の身体を完全にソファに押し倒した。むちゅ、じゅる、と音を立てて吸い上げては、舐めていない反対側をこね回す。口が塞がっているので一向に次の台詞が聞こえてこないのが気がかりではあるけれど、彼の照れ隠しなのかもしれないと多めに見ておいた。

だけれど、それにしても静かだ。というか長い。あれ？なんだか舐められ過ぎていないか？若干焦らされたから、実は結構乳首でも感じていて困っているんだけど。そうでなくともセノ君は乳首責めも上手なんだからと、僕は彼の肩を軽く叩いて、小さな声で呼びかける。

「ん、あ、あの、セノ君...？もう、胸はいいんじゃないかなっ」

「なんで？好きにしていいいんでしょ？」

「やっ、それは言葉のあやで」

「そうやって嫌々してる時に、無理矢理されるのが好きだもんね？」

「〜〜っ！？」

けれども役に入っているセノ君は、僕の言葉に耳を傾けない。もしくは、意図的に無視している可能性もある。ただ、いずれにせよ彼が乳首責めを続行するのは僕にとって大問題だった。

あくまで台詞練習の今日は、プレイに関しては大きな取り決めがない。しかもふわっとしたSMなら、嫌がる僕をいじめるのは筋が通っている。最悪だ、これだと何を言っても「嫌よ嫌よも好きのうち」と捉えられてしまう。

「はう、う、ま、って、僕、あんまり、されたら、あ、ち、乳首、ダメになっちゃうから！」

「んん？じゃあ今日もダメにしちゃおっか」

「やあ、あっ、んん、んゝっ！！うは、あ、あゝあ、やだ、ズルい、僕が好きなのばかり...っ！はあ、ああ、ダメ、んも、お、だ、め、だめだってばあっ！」

じゅうう、と音がするほど強く吸ってから、小刻みに舐められて、ビクビクと身体が痙攣する。もう無理だ、続けられたら耐えられなくなってしまう。でもイかないように彼の頭を引きはがそうとしたら、次は手首をソファに押さえつけられてしまった。手が無理ならと足をばたつかせてみても、僕より体格のいいセノ君をソファの下に追いやることはできない。

「邪魔してくんの何？乳首イキ嫌なの？」

「ッ、だ、って、そこでイッたら僕...っ！」

もちろん、セノ君は分かっている。僕が乳首でイケることも、演技抜きで乳首イキしたら、全身が敏感になることも。感じやすくなれば、僕だって冷静ではられない。その中で演技をするのが難しいことくらい、セノ君だってよく分かっているはずなのに。

ダメだ、気持ちよくなってしまう。器用で熱くて、繊細な舌先に。全てを飲み込む唇に。僕はまた負けてしまう。

「んやああああっ！！まっ、て、待ってえええっ！」

「やら、待たない」

「んんんっっ！！んふ、ううう、うっ、～～ッッッ！！！」

ガクン、ガクンと大きく胸が波打った。連動して腰や太ももが跳ねる。イカされてしまったことに悔しさは滲むのに、どこかで快感に流されたい自分もいる。いけない、意志を強く持たなければと思うのに、その間も乳首を吸われ続けた。追加の刺激を与えられたせいで、本当はすぐに終わるはずの乳首絶頂の時間が長引く。

「は、はふ、うううゝ...ッ！んあ、あ、も、イッた、イッ、う、うあ、ああ、ああああ...！」

ちゅ、ちゅ、と最後の最後まで舐めつくすように愛撫を続ける彼を止めたい。なのに手首を抑えられているから抵抗できない。ガク、ガクと身体を揺らして涙を流すしか無い僕は、彼の気が済むまでイカされてしまう。

「だ、め、も、だめえええ...ッ！んふあ、ああ、ッ、イク、イッ、んゝ...
っ！っは、あ、嫌、も、舐めないで、んっ、んん、だめ、ダメだって、言って、
うう、うううっ！！」

しつこい乳首責めは、僕が嫌がっても関係なかった。彼が満足するのがいつなんだと嘆く僕の顔を時々見ては、セノ君は楽しそうに笑う。それが悔しいのに、イカされてばかりなのが惨めだった。

それからしばらくして、ひっ、ひっ、と喘ぐこともままならないほどイカせてから、やっとセノ君は握っていた手を離して、胸から顔を遠ざけた。その時見上げた彼の、勝ち誇った顔と言ったらない。雄っぽい笑みで僕を見て、くりくりと乳首を弄んでくるのもやらしくて嫌になる。

「ん、んふ、う、も、やめてって言ったのに...！」

「メロさんなら我慢もできたでしょ？」

「できないようにするくせにっ！」

悪戯ばかりの手をはたいてから、むっと彼を睨む。だけれど僕の怒りをむけられても、彼は嬉しそうに笑っていた。ふとした瞬間に現れる、演技じゃない素のセノ君を見ると、僕も素に戻ってしまう。この時に感じる、胸をくすぐられるよう

な、ちょっと痒みにも似たムズムズとした自分の内側の感情が、僕の演技の邪魔をして余計に厄介だ。

ただし彼もプロなので、お互いが自然体の時間は長くない。すぐに表情を切り替えたセノ君は、すりすり僕のを太ももをさすって、次の展開へと移っていく。

「ねえ、乳首でイっちゃったやらしいところを見せて？」

欲を言えば、まだ完全に絶頂の余波が収まっていない中で、行為を続行するのは嫌だ。だけれど、この程度の疲労で少し休ませてと頼むのも先輩らしくはない。だからセノ君のために、僕は自分の足を開いた。かぱりと開く足の間に残る衣類を脱がされると、照明を反射して卑猥に光る自身が見えた。そこで自分の中に羞恥心は生まれたけれど、表情には出さずに大人しくしておく。

「ここ、やらしくなってる。乳首、そんなに気持ちよかったんだ？」

「はぁうッ!？」

目の前に見える僕の熱に、セノ君がちょっかいをかけないはずはない。いきなり舐められたときは、触るでもなくまずフェラからなのかと、思わず自分の上着をきつく握ってしまった。ただでさえセノ君のフェラは気持ちいいのに、突然するのは良くない。思いがけない刺激に、咄嗟に足を閉じてしまう。

「んふ、う、う、あ、な、舐めちゃだめえ...！」

「なんで？好きでしょ、ほんとは」

「う、好き、だけど...！気持ちよすぎて、だめ、だからっ」

「そう？じゃあこっちならいい？」

「んんんっ！？」

でもセノ君は、僕が恥ずかしがって足を閉じることも予想済みだ。だけれど今は、開いた足の間に彼の体が入り込んでいるから、閉じられてもせいぜい肩幅ぐらい。だから完全に閉じられないせいで、僕の秘部にも簡単に手が出せる。唾液と先走りを纏った指は、あっさりと僕の中に入ってきた。

そして指を入れた時、セノ君にはバレてしまっただろう。実はさっきお風呂に入ったとき、万が一襲われた時のためにと、そこを自分でほぐしておいたことが。明らかに緩んだ中に指を入れたら、彼はちょっと嬉しそうに笑っていた。にや、といやらしい笑みで僕を見てきたので、視線の意図を悟ってそっぽを向く。

「やっぱりココが一番好きなんだ？」

「べっ、別にそういうわけじゃ」

「じゃあ中が良い感じでほぐれてるのはなんで？」

「ッ、だ、って、明日が休みの日に連れてこられて...！何にもなかったことなんかないから」

「今日も何かされるかもって思って、一人で準備したんだ？えっちじゃん」

「〜〜〜ッ！」

ぬぐ、ぬぐ、と中に指を埋められながら、事細かに僕の心境をほじくるのをやめてほしい。そうだよ、君がどうせ手を出してくると思ったから、半分は身を守る

ために準備したんじゃないか。だってほぐしていないと、俺がやるっすね、とか言ってしつこいくらい慣らしてくるし、その過程で何回もイカせてくるから。身体の負担的にも、自分でやったほうが楽なんだ。そう、だからこれは彼とのエッチを期待したんじゃないく、自己防衛の一環だからと、脳内で自分に言い聞かせる。

ただし羞恥に顔を赤くしてられるのも短い時間だ。彼の舌と指に愛撫されてしまっちは、僕が無駄な事を考えられる余裕は瞬時に削られていく。ちゅ、ちゅ、と亀頭にキスをしてから先端をしつこく舐める舌に、まずは腰が軽く浮く。

うぁ、とあからさまに感じた声を出したら、ちょうどその時に前立腺を擦られた。なんでそうやって、僕が絶対に感じてしまう時を狙うんだと足に力をこめたら、ねっとりと熱を舐め上げられて、ガクガクと太ももが揺れる。

「んはああああ...ッ！は、あ、や、気持ち、い、ん、んんううっ！」

「俺が今、メロウの好きなとこ擦ってるの分かる？」

「ふ、う、分、かる...！いいとこ、ッ、すりすり、されて、あ、あ、ひ、っんん！」

「ちゃんと分かるんだ？じゃあココ、いっぱいよしよししておかないと」

「はふ、ん、ンンンッ！うは、ああ、あっ、ッ、あ、あっ...！！」

でも僕は、前立腺を刺激される間に思っていた。これは彼の言葉責めの練習だから、さっきのように恥ずかしい台詞を強要されるのではないかと。だけれど、質問自体はなんとなく恥ずかしいものの、今回はイエスかノーかで答えられるよう

な、簡単な攻め文句に変わっている。なるほど、カップル同士の甘めのセックスならこういう方向の攻め文句もありなのかと、なぜか僕が感心してしまった。無理強いをされないせいか、僕も少しばかりリラックスして彼の愛撫を受け入れることができた。最初は指一本で前立腺を擦られて、その手つきが甘くて夢中になる。中が十分ほぐれていると分かったセノ君は、さほど時間をかけずに指を増やしてきた。だから僕も、徐々に責め方を激しくしていった、僕が嫌と言うまで続ける気だなと予想をつける。

「こうやって2本でくりくりされるのは好き？」

「ん、うん、それも、好き...！」

「足、さっきみたいに開ける？」

「っ、でき、る...！」

ただ、この予想は若干的外れだった。確かに恥ずかしい格好にされるし、質問攻めに答える必要はあるけれど、刺激がほとんど強くならない。気持ちよくないわけじゃないけれど、フェラも緩いし、指使いも優しい。いつものセノ君とは思えないくらい丁寧と言ってもいい。あれ、なんでだ、僕がもっとって言わないせいなのかと、彼を見つめて首を傾げた。

「んあ、あ、セノ、君...？それ、もっとしても、いいから」

「ん～？なんで？今は気持ちよくない？」

「えっ？いや、気持ちいい、けど」

「何？またこっちいじめてほしくなった？」

「わっ！？」

でもセノ君の考えが読めずに適当なことを口走ったばかりに、事態は悪化した。

ぐっと上の方に身を乗り出したセノ君は、勢いのままに僕の上着をめくる。はっとしたときにはもう遅くて、彼は僕の乳首に吸い付いていた。

ヤバい、そこはさっきイッて敏感になっているのにと彼の背中を叩いてみたものの、もちろんなんの効果もなかった。しかも状況としては、中に指が入った今のほうが悪い。

「やあっ！うう、ま、って、今ダメ、乳首もしちゃダメッ！！」

「ふふ、焦ってる焦ってる」

「ひう、ん、ンンうっ！！ふぁ、ああ、だ、め、両方だめ...！うう、しっこいっ、もうしっこいからっ！んんんぐっ！いい、もういいって言ってるのにっ！！」

優勢を取られてからの逆転は、僕らの体格差を考慮すると相当難しい。ただでさえ指も入っているから神経質になるというのに、再度の乳首責めとはどういうことなんだ。しかも、胸にしゃぶりついていたら喋れないじゃないか。言葉責めの練習はどうしたんだと、彼の下で必死に暴れる。

「んく、う、うゝ ～～～っ！あ、あふ、う、ちょ、っと！れ、練習は、どうしっ、ん、ひいっ！？うあゝ、ああ、また、またそれ、やあ、ズルい、セノ君ばかり、うう、んんうううっ！！」

でも僕が暴れたところで、彼の舌技が弱まるわけじゃない。ねちっこく吸い付きながら小刻みに舌を動かすコンビネーションは健在だし、さっきと違って手首を抑えられていない分、反対の胸を弄することもできる。あとはもちろん、前立腺だって揉まれている。ぬぐぬぐぬぐと擦られ続けると、その分だけ快感が積もっていく。

ああ、まずい、これはまずい。絶対にイカされる、もう逃げられないと、必死に彼にしがみついた。せめて自我だけは保っていないと、彼に心まで持っていかれてしまう。それぐらい、セノ君の愛撫は快感が強い。

「うはあああああっ...！！ああ、イツ、く、もお、もおだめえっ！あ、あ、あ、イク、んんんイクイクイクう...っっ！！」

ぎゅうう、と彼に抱きつきながら、地味な射精を伴うイキ方をした。なんだかスッキリせずに股間のあたりはモヤモヤするのに、快感だけは重い。体内で暴走する熱が発散できずに、口からはせわしく息が出ていく。

またイカされた。本当は耐えようと思っているのに、好きな責め方がバレているせいで全然我慢させてもらえない。むしろ遊ばれている感の方が強い。最悪だ、こんなんじゃ練習にならないよと、じわりと目じりに涙が滲む。

いや、それでも彼が、こういう情けない僕をなじってくるなら練習にもなる。台詞のレパートリーを増やすなら、今が絶好のチャンスだった。なのにセノ君ときたら、僕がイッた顔を眺めてから、ニヤリと笑ってまた乳首に吸い付いた。

「ッ！！？やっ、何して、今ிட்ட、ிட்டでしょ！！」

「うん」

「ん、っ、うん、じゃ、なくてえっ！はう、う、ううううっ！？や、あ、練習、しよ、言葉責めのれんしゅ、う、うあ、ああああっ！？」

むちゅ、じゅっと僕の乳首にしゃぶりついて離れない彼の頭を、ペチンと軽い力で叩く。どういふことなの、そこを舐めていたら喋れないでしょ、いい加減に口を離して練習に戻れと訴えるも、加減を忘れたセノ君には無意味だった。むしろ楽しそうにしている。何を笑ってるんだ、こっちは冗談じゃないぞ。責められ損だ。まさかと思うが、このままもう一回イカせるつもりじゃないだろうかと、さっきよりも激しく抵抗する。

「ねえ、こら、こらってばあ！！うう、お、かし、い、おかしいからっ！はあ、はあっ、ッ、あゝ、や、だ、イクのやだ、もう終わるからっ！」

「んふふ」

「~~~~ッ！！何笑ってんの！んうううっ！！い、や、ああ、も、なんでええっ！！ダメ、ダメって、あ、あ、あうううんっ！」

でもセノ君ときたら、僕が正論を言ってもお構いなしだ。むしろもっとイケとばかりに責め立ててくる。ふざけるんじゃない、僕だけ伊っても意味ないだろうと何度も頭を叩いたものの、時々報復の強い吸い付きが返ってくるだけだ。

なんなら、中の指は増えていた。3本の指がバラバラに前立腺を揉みこんでくるから、そっちも気持ちよくて乳首イキ以外の絶頂も迫っている。嫌だ、止まらな

くなる。ただ射精するのと、中イキや乳首イキは勝手が違うからと、彼を必死で説得した。

「や、ああ、だめ、僕、ちゃんと、イケてないからあ...っ！これ、ダメなイキ方する、止まなくなるやつだからっ！」

「それ言って、俺がやめると思う？」

「は、ひっ、聞いてない、こんなの聞いてないっ...！うう、やだ、イク、の、嫌あ...ツツ！！待って、ホントに、キツ、う、うゝっ、は、あああゝ.....
っ！！！」

ただし僕が言葉を尽くしても、セノ君に響くかどうかは彼次第だ。そして残念ながら、暴走気味のセノ君は自分の楽しみを優先している。そのせいであっけなくまたイカされてしまった。

だけれど、問題はここからだ。

2回の絶頂で、彼が満足するならいい。これで流れが戻るなら許せる。でも満足しないとなると、僕にとって良くない現実が待っている。

「は、はあ、はあう、ん、ンンンッ！！？」

耐えろ、キツいけど耐えてセノ君を引きはがさなきゃと、彼の両肩を掴んでセノ君の方に押した。それでも無理だった。震える指先で、セノ君を持ち上げることもなんてできない。だから彼の舌がずるりと降りて行った時も、僕が完全に出遅れてしまう。

ぬろろ、と舌を這わせながら喉まで熱が飲み込まれた時、あまりの気持ちよさに瞬間的に射精してしまうかと思った。マズいと思って自身を握る。でもその手の無い部分を扱かれて、出し入れ出来る場所で口を上下に動かされて、僕は我慢どころじゃなくなった。

「ゃあああっ！！？だめ、今そっちするのだめえっ！！んんうっ！で、ちゃう、全部イッちゃうからあ！あ、あああうううっ！！？」

唐突に始まった濃厚なフェラと手コキに翻弄される。ただでさえ正しい射精への欲求が高まっていたというのに。乳首でイッて、全身敏感にされたというのに。今は絶対にしてほしくないと思うとき、一番気持ちよくて逃げられない場所を責めてこないでほしい。

力が入らない指先は、フェラの途中でのけられた。かじ、と指先をかじられると、なんだかこんなことをして自分の射精を封じているのが情けなくなる。負けを認めたように手を離せば、満足した彼は亀頭を積極的に舐めた後、強い力で熱を吸い上げた。

「ふあああああゝ...っ！あ、あ、出る、も、イクううう...！！あ、や、口、離し、っ、ん、んゝ~~~~っ！！」

根元を握ることで射精を無理矢理止めていたから、せき止めるものがなくなればすぐに精液が出口に向かっていった。あっさりと射精してしまったこともそうだし、セノ君の口内に放ってしまったことも惨めに思う。

でも僕を射精に導いた口内は、精液を即座に喉の奥に流し込んだかと思うと、またしても先端部を舐め始めた。なんだと、イッたばかりなのに何をしているんだと、今度は彼の耳を掴んで猛抗議する。

「ちょ、っとお...！？もういいでしょ！何回イカせる気なの！」

「え？予定ではあと5回くらい？」

「っ、ご...！？意味わかんないから！ていうか、さっきからセノ君全然喋ってないし！見てる人がいいなって思う台詞の練習するんじゃないの！？」

「あ〜...。うん、そうかもっすね。でもこれも台本にあって、それも練習しようかなって！」

「そんなの聞いてないよ！？だったら僕にも事前に言うべきでしょ！」

「今言った」

「い、いっつも自分に都合いいことばかりなんだから！そういうことならもうしないっ！っ、こら、しないって、う、ん、あ、あ、やだ、もおやらな、ああ、あう、ンンッ！！？やっ、もうダメ、ダメダメダメえええっ！！」

でも物理的に彼の耳を広げたはずなのに、自分勝手な言い訳を続けるセノ君は、僕の意見を聞こうとしない。いや、正確には聞こえているのかもしれないけれど、僕に寄り添った折衷案なんてものを考える気はない。ただ自分がやりたいからやるという思考回路で、イッたばかりの僕に愛撫をし続けた。

信じられない、この猛犬め、お願いすれば何でもすると思っているんだからと、心の中で毒を吐く。もちろん後輩のサポートはしたいけれど、限度はある。だから言うことを聞かない彼に嫌気がさして逃げようとしたものの、またしても両手

を掴まれてしまった。げっ、これは良くない流れと危機を察知したけれど、だからといって何ができるわけでもない。そして嫌な予感通り喉の奥まで深く熱を飲み込まれて、奥でぎゅっ、ぎゅっと絞るように自身を締められると、強制的に2回目の射精に導かれる。

「ひぎう……っ！！？うは、ああ、そ、れ、きついいい…！やぁ、イク、イっちゃうから、吸わな、あ、あうううッッ！！？んひ、い、あ、だめ、もお許し、ッ、あ、あゝ ああああっっ！！」

快感による反射で、彼の喉に擦りつけるように腰が動いた。それはセノ君にとっても苦しいはずなのに、手練れの彼は苦しさを表面に出さずに精液を受け止める。さすがに飲み込んだ後は呼吸のために熱を口から離していたけれど、今度は精液が垂れていく後孔にも舌をつけ始めた。今度はそっちもする気かと、僕はほどける見込みがない腕に力を入れて抵抗する。

「やっ！！？舐めなくていい、そこ舐める必要ないからっ！」

「俺は舐めたいっす」

「知らないよ君の気持ちは！うは、あ、だめ、だめ、お尻舐めるの、弱いんだってば…！やめて、ちゃんと練習してよっ！」

「ごめんねえメロさん。これも練習だからやめてあげられないかも」

「っ、絶対、嘘、嘘だからっ！！ひどい、うう、ん、んっ、んんん…！」

はあ、ああ、だめ、だめ、んああああっ！手、離して、離してえええっ！」

指や誰かの自身に擦られるのは耐性がある方だと思うけれど、そっちを舐められるのは割と苦手な方だと僕は思う。鍛えようもない粘膜を舐められると、腰の骨のあたりがゾクゾクして、下半身の力が緩む。この感覚がどうにも慣れなくて、なのに快感には違いないと分かるから、自分が制御できなくなる感じが好きじゃない。

あとは、やる人のテクニックにも大きく左右されると思う。その点で言うなら、セノ君はとにかく上手な方だろう。ちなみに僕は、セノ君にこれをやられたくないがために、お風呂場で事前準備をしたと言っても過言ではない。それくらい彼のアナル舐めは気持ちよくて、自分を保っていられなくなる。

ぬる、ぬる、と期待させるように入り口の周りを舐めてから、ゆっくり尖らせた舌先が入るころには、ガクガクと膝が揺れていた。逃げたい、その舌から解放されたいと上半身が上に移動する。でもどれだけがいても、腕を引っ張られて元の位置に戻されてしまう。

「ひい、い、嫌、やあああっ！舐めないで、だめ、ホントにだめ、っ、うう、あ、あ、も、終わり、終わりにい...ッ！」

「これされるの弱いっすもんね。気持ちよさそうなのに」

「ふう、うう、ん、い、いいから、ダメなの...！」

「なら、こっちの方がいい？」

「んふあっ！？」

だけれど性悪な彼は、僕が嫌がる様子を長く楽しもうとする。きっと長時間続けられたら気持ちが折れてしまうのだけれど、あえて僕が諦める前にフェラに戻っ

て、精神力を回復させる。そしてもうアナルは舐められないかもと油断する頃合いを見て、またお尻を舐めた。

そもそも嫌じゃないというだけで、彼のフェラだって相当気持ちいい。だから何度も自身と熱の間を往復して舐められるうちに、体力が削られる。時々どちらに行くか悩むように蟻の門渡りを舐められると、ぞわわっとお腹が切なく疼いて、足の指にぎゅっと力が入った。

「んんんゝッ...！あ、あ、や、そんな、そんなとこ...！」

「ここも結構気持ちいい？それとも、早くどちらか舐めてほしい？」

「や...！終わりたい、もう終わりたいっ！」

「だあめ。まだ俺とえっちすんの」

「ううゝ〜〜〜...っ！ふ、う、うあ、あ、待っ、だめ、お尻もうやだっ、ううっ、んんううううっ！！」

適度に焦らしては、時に射精を促されて、僕はすぐにクタクタになってしまった。それから片手を解放してもらったけれど、僕の自由とセノ君の自由は折半だ。彼の片手が空いたら、すぐに乳首や熱にも刺激が追加されて、いよいよどうしようもなくなっていく。

「んは、ああ、イッ、イッてる、イッてるからああ...ッ！！先っぽ、やめ、ッ、っっ！！うは、はっ、はふ、ッぐ...！んん、だ、め、お願い、今は、今はや、あ、〜〜〜ッッ！！」

まただ、またイカされると身構える時間すらない。イッてる間にイカされる。責められ放題の時間に、僕はただただ翻弄された。射精を伴う絶頂も、伴わない絶頂もごちゃまぜだ。快感の追い込みが激しすぎて、目の前がチカチカする。それでも指も舌も止まらないから、演技どころじゃなくなっていく。

「ひ、いい、い、ッぐ、う、うううんっっ！！ふああ、あ、やえ、て、も、もおだめえええ...ッ！！い、いっぱいイク！またイッちゃうからあっ！ンンッ、舐めないで、指、ぬいっ、ッ、ああ、そこ許し、あ、ああああああっっ！！」

ちゅるちゅると精液のこぼれる先っぽを舌先で弄びながら、ぐり、ぐりっと前立腺を押し込んでくる。絶対に僕をイカせる手つきだ。それが一回で終わってくれればまだいい。でも僕が耐えきれずに中イキしたら、次は中の指はそのままに、広がる孔の縁を舐めてくる。つう、つう、とめくれる粘膜をそっと刺激されると、大きく膝が揺れ動いた。セノ君の肩の上に向けられた足が、ガクンと中を蹴る。

「あ、あ、お、お願い、もう、もうイキすぎ、てる、っ、んッ、んんっ！はあ、はあ、ど、して、しっこい、今日しっこいよおおお...ッ！」

あまりイカされ過ぎると、こちらメンタルがやられていく。撮影の練習どころじゃなくなった僕は、みっともないけれどぼろぼろ涙を零して訴えていた。ひ

ぐ、ひぐ、と鼻をすすりながら、後輩であるはずの彼に、いつの間にか許しを請う側に変わっていく。

「ッ、ふ、ふぐ、うう、うううんんっ！や、も、離して、許してええっ！イキたくない、もおイキたくないいいっ！！」

「そんなに嫌？じゃあ今、メロさんが何回イッたか覚えてたらやめてあげる」

「そんなの分かんないっ！」

「ならあと、最低でも5回は頑張らないと。俺の練習にならないんで」

「多い、よ、無理、加減して、お願い、おねが、う、んむ、ううっ、ンンんっっ！！」

でもお願いしたからと言って、彼が聞き入れてくれるとは限らない。逆に僕が我儘を言っているようにたしなめられてからは、なぜか自分で回数を数えさせられて、それもまた心にくる仕打ちだった。いや、それでもまだちゃんと5回カウントさせてもらえるならいい。時々、イッたと言いたいのにならぬキスで邪魔される時もある。あつて、数回分は誤魔化されたと思う。

「あふ、うう、イッ、イク、ッあ、あああっ！」

「イッちゃう？これで何回目？」

「ん、ッ、あ、さん、3回、め、っ、んむ、う、ううっ！！？っ、～～～
～っっっ！！！？？」

「ん～...？んふ、よく聞こえなかったかも。何回目だったんすかねえ、今の」

「あゝッ、あゝあ、っ、ひ、どい、こんな...！んあ、ああ、イッ、あ、今のが、さん、っう、ううんっ！？あああああダメダメダメッ！！！！イッたばかりなのに舐めちゃだめっ！！！！それ、嫌、やあああああああっ！！」

僕をイカせることに特化した彼は、とにかく僕を無茶苦茶にしてきた。容赦なく射精までを駆け足で急きたてて、それからあえて刺激を加えることで、一回分を長引かせる。そして僕が息も絶え絶えに1回分を終えても、それを1カウントとしてくれない。だからどうにか5回分を数え終えたころには、両手を離されていてもなんの抵抗もできないほどグズグズに溶かされていた。

ー続きは本編にてお楽しみくださいー